

令和 5 年 6 月 18 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02154

研究課題名（和文）「経学史」の成立とその歴史的展開に関する研究 湖南経学と日本中国思想研究の邂逅

研究課題名（英文）A Study of Rise and Historical Development of "History of Classical Studies" : An Encounter between Classical Studies in Hunan Province and Chinese Studies in Japan.

研究代表者

井澤 耕一（IZAWA, KOICHI）

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：00455908

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の成果は以下の3つに大別できる。第1に、20世紀初頭の湖南の経学者、皮錫瑞、馬宗霍の経学史観を究明した。「『経学歴史』の制作過程にみる皮錫瑞の経学観」を彭林『中国経学』第20輯（广西師範大学出版社）上で発表した。また馬宗霍『中国経学史』の訳注稿を『奈良教育大学国文』上で発表した。第2に、20世紀前期に湖南の地を踏んだ日本人研究者の足跡をたどるため、長沙市周辺の史跡を訪れ、その現状を調査した。第3に、湖南省以外の経学者の学術を理解するため、劉師培『中国歴史教科書』、夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』の訳注を『茨城大学人文社会科学部 人文コミュニケーション学論集』において発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中国経学史および中国史の名著を翻訳することにより、最新の研究成果を踏まえた、独創的でより優れた「経学史」「中国史」を世に問うことができたことに最大の意義を有する。そして訳注作成を通して、先行する諸研究を統合するに止まらず、中国地域思想研究、日中学术交流史研究といった新たな視点から、伝統的学問研究の再構築が可能であることを、系統的かつ具体的に示すことができた。また従来、日本における中国の地方研究は、中国近代史研究の視点から数多く行われてきたが、本研究を進めたことにより、人文学における新たな研究テーマの創造において、非常に価値あるものとなった。

研究成果の概要（英文）：This research project is a new-angled investigation into the rise and historical development of "History of Classical Studies", focusing on its encounter with Chinese Studies in Japan, and has achieved three satisfactory results. First, the publication of the following two papers: "Pi Xirui's View of Classical Studies in History of Classical Studies" (Guangxi Normal University Press) and "A Commentary on History of Chinese Classical Studies" (Nara University of Education). Second, field research at some historic sites around Chansha City for tracing the footsteps of Japanese scholars who visited them in the early 20th century. Third, the publication of the following two commentaries for understanding academic studies carried out in places other than Hunan Province: "Commentary on Liu Shih-p'ei's Textbook of Chinese Ancient History" and "Commentary on Hsia Tseng-yu's Chinese Ancient History for High Schools Students: A New Version".

研究分野：中国近代経学史

キーワード：中国湖南経学 近代日本における中国研究 皮錫瑞 馬宗霍 劉師培 夏曾佑 狩野直喜 松崎鶴雄

1. 研究開始当初の背景

研究の手法として、ある対象を総合的・系統的に理解しようとする場合、それを成立から現在に至るまで歴史的に通観するというのは、有効なものと考えられる。

日本で著された経学通史としては、本田成之『支那経学史論』(弘文堂、1926)、瀧熊之助『支那経学史概説』(大明堂書店、1934)および諸橋轍次『経学研究序説』(目黒書店、1936)が主なものとなる。特に本田氏の『支那経学史論』は、日本はおろか中国でも編まれたことが無かった初の経学通史として、特筆すべきものであり、当時の最新の研究成果と本田氏個人の視点が見事に融合・投影され、今見ても啓発される良書である。

しかし、上に挙げた通史は、刊行からすでに四分の三世紀以上が経過し、そこに記述された内容は、当然のことながら戦後の研究成果は反映されていない。

もちろん戦後において経学史が研究されていなかったわけではない。たとえば近年に絞っても、野間文史氏は、五経正義、十三経注疏の解読を通じて、いわゆる「注疏の学」の成立史を明らかにしている(『五経正義の研究 - その成立と展開』研文出版、1998年および『十三経注疏の研究 その語法と傳承の形』研文出版、2005)。また古勝隆一氏は従来あまり注視されてこなかった六朝期の経学史を、六朝という時代の独自性に留意しつつ見事に論じている(『中國中古の學術』研文出版、2006)。しかし以上の先行研究は、個々に優れたものではあるが、いわゆる経学の成立からその完成、更に終焉に至るまでを俯瞰した通史は新たに生み出されることはなかった。その原因としては、戦後の研究体制が、時代ごとに細分化され、相互に連動すること無く、別個に行われてきたことに起因すると思われる。

一方中国では、近年「国学」再考の波に乗って、経学に関する研究が陸続と発表され、従来とは違った新たな視点からの検証のみならず、儒教史そのものの再構築が図られている。その成果として清華大学・彭林氏主編の『中国経学』(2023年現在第30輯まで刊行、広西師範大学出版社)、姜広輝『中国経学思想史』全4巻(中国社会科学出版社、2003~2010)、湯一介『中国儒学史』全9巻(2011)などが挙げられ、経学に関する書籍の出版件数も、評点本を含めれば年々右肩上がりの状況にある。

そもそも儒教史研究を進めていくにあたり、経学史を系統的に理解していることは必要不可欠なことである。しかし戦後、日本において学術的に優れている経学通史が刊行されていないということは、儒教思想研究に携わる者にとって大変憂慮すべきことである。こうした現状に鑑み、平易かつ最新の研究成果を取り入れた経学史の提供は、急務の課題である。こうしたことから、経学の成立に始まりその終焉までに至る経学の歴史的展開に関する系統的かつ総合的な研究が必要であると考えにいたった。

2. 研究の目的

申請者は、2013年から、基盤研究(C)「経学の歴史的展開に関する総合的研究」(課題番号 25370042)において、皮錫塙『経学歴史』および劉師培『経学教科書』の訳出および新注の作成を行ってきた。さらに湖南師範大学図書館蔵『経学歴史』稿本調査により、従前知られていなかった皮錫瑞の思想的変遷を明らかにすることができた。

(1)今回の研究では、上記の成果を踏まえ、皮錫瑞や劉師培の次の世代にあたる湖南経学大師の一人、馬宗霍(1897~1976)『中国経学史』(1936)を訳出し、それに注を付することを旨とする。本書は、関口順氏の言葉を借りれば「折衷派」、つまり清末の今文経学(『経学歴史』)と古文経学(『経学教科書』)の対立を調和的に再統合することを目指した書で(『儒学のかたち』194-95頁)、経学史研究において重要な文献といえる。しかし、本書の訳書または注釈書は、国内はおろか中国でも公刊されたことはなく、申請者は、研究期間中最新の研究に基づき、注釈の形で経学史を詳細に分析し新たな見地を示していく。こうした作業は、従来看過されてきた経学史研究に内在する問題点を浮かび上げさせ、研究会における重要な論点となるであろう。またその議論が訳注に還元されることで、より優れた中国経学史の構想を日本の学界にもたらすことができ

よう。

(2)次に、今回の研究期間中、皮錫瑞や馬宗霍を生み出した清末から民国期における湖南経学の歴史を辿りながら、「経学史」が成立した要因を探りつつ、さらにそれが特に昭和初期における日本の中国思想研究に与えた影響を明らかにする。例えば皮錫瑞の思想が日本の学术界に影響を与えたことは、上述の狩野氏、本田氏の著作でも明らかである。例えば皮錫瑞の門弟にして、日本への留学の経験もある李肖聃(1881～1953)も、「日本博士狩野直喜研究先生(皮錫瑞)之書、常于京都大学諸生講演」(『湘学略』)と述べているほどである。本研究期間中において申請者は、大正から昭和初期にかけて中国に渡り、湖南の経学者と交流した日本人、例えば宇野哲人、諸橋轍次、倉石武四郎、吉川幸次郎、当地の経学者であり書誌学者であった葉德輝(1864～1927)の門弟であった松崎鶴雄、塩谷温、仏僧の水野梅暁、ジャーナリストの宗方小太郎らの著作、日記、旅行記、さらに日本人と交流をもった中国人経学者の著作や日記、その年譜などを詳細に検討し、経学を中心とした日中間の学术交流の実相を解明していく。日本における湖南省研究は、従前、中国近代史研究の視点から行われてきたが、本研究を進めることにより、新たな思想研究のテーマ構築に向けて、非常に有意義なものになるといえよう。

3. 研究の方法

2で挙げた目的を達成するため、研究代表者および分担者は以下三つの手法を用いて、研究を推進した。

(1) 馬宗霍『中国経学史』の訳注稿を作成し、これに合わせて訳出の際に出た問題点や課題を解決するための研究例会を定期的開催した(2020年度以降は新型コロナウイルスの世界的流行により、メール、電話、ZOOMによる意見交換に変更)。その際それぞれ問題となる具体的な事象について検討を重ね、その結果を反映させて、訳注草稿の訂正を行った。

(2) 大正から昭和期にかけて、湖南の地を踏んだ日本人研究者の足跡を辿る為、省都長沙、隆回県、瀏陽市における史跡の歴史の変遷及び現状を調査した。事前に塩谷温や松崎鶴雄、狩野直喜、倉石武四郎、宇野哲人、諸橋轍次の著作を精査した上で、現地においてはそれを基に関連する史跡を調査した。また中国の近代経学史研究の第一人者である湖南大学教授(当時)呉仰湘氏と面会し、訳注作成および史跡調査に関する意見交換を行った。

(3) 20世紀初頭の中国経学の状況をより深く理解するため、湖南省以外の経学者、江蘇省揚州出身の劉師培(1884～1919)『中国歴史教科書』、浙江省杭州出身の夏曾佑(1863～1923)『最新中学教科書 中国歴史』の訳注を作成した。研究例会においてもその訳稿を検討し、一部を大学紀要において発表した。また劉師培の揚州周辺を訪問し、儀徴市において、劉師培研究の第一人者である、万仕国氏(著作に『劉師培年譜』『儀徴劉申叔遺書』がある)と面会し、劉師培の経学観、歴史観に関する意見交換を行った。

4. 研究成果

(1) 2016年度の研究成果

研究代表者は一昨年度完成させた劉師培『経学教科書』の訳注に引き続き、劉師培『中国歴史教科書』訳注(一)を作成し、『茨城大学人文学部紀要 人文コミュニケーション学科論集』第22号に掲載した。さらに研究者各人が馬宗霍『中国経学史』についての考察と訳稿作成を進めていった。

の考証過程において明らかになった問題点や課題を解決・整理するために、研究会を5月29日および7月15日～17日に、関西大学総合図書館で開催した。その際研究者・分担者が、作成した論考について議論を重ね、改訂作業も同時に行った。また関西大学総合図書館所蔵の書籍を丹念に検索して、湖南経学が日本の学术界に如何に流入していったのか、その足跡をたどった。

(2) 2017年度の研究成果

20世紀初頭以降の学者である夏曾佑、劉師培、馬宗霍の経学史観を究明する作業を進めた。

代表者は、昨年度に引き続き、劉師培『中国歴史教科書』、そして新たに夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』の訳注を、『茨城大学人文社会科学部 人文コミュニケーション学論集』で発表した。さらに各人が馬宗霍『中国経学史』について考察と訳注稿作成を進め、その成果の一部を『奈良教育大学国文』誌上に発表した。

上記の訳注作成を行う際、その過程で明らかになった問題点や課題を解決・整理するため、関西大学図書館及び茨城大学図書館において、5月27・28日、7月22・23日、8月25・26日、12月2・3日、3月27・28日それぞれに研究会を開催した。その際、研究代表者・分担者が、作成した論考について議論を重ね、改訂作業を行った。

大正、昭和期、湖南の地を踏んだ日本人研究者の足跡をたどるため、代表者は3月14日～20日に省都長沙、隆回県、瀏陽市における史跡の歴史の変遷及び現状を調査した。事前に塩谷温や松崎鶴雄、あわせて狩野直喜、倉石武四郎、宇野哲人、諸橋轍次の著作を精査し、現地ではそれをもとに彼らが訪れた、または研究対象とした経学者に関する史跡を調査し、その成果を3月27・28日の研究会で発表した。

(3) 2018年度の研究成果

20世紀初頭以降の学者である夏曾佑、劉師培、馬宗霍の経学史観を究明する作業を進めた。代表者は、昨年度に引き続き、劉師培『中国歴史教科書』、夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』の訳注稿を作成し、その一部を『茨城大学人文社会科学部 人文コミュニケーション学論集』にて発表した。また研究代表者・分担者が馬宗霍『中国経学史』について考察と訳注稿作成を進めた。

上記の訳注作成を行う際、その過程で明らかになった問題点や課題を解決・整理するため、関西大学図書館及び奈良教育大学橋本研究室において、5月26・27日、8月4日、研究会を開催した。その際、研究代表者・分担者が、作成した論考について議論を重ね、改訂作業を行った。

代表者は8月24～26日、江蘇省南京市、儀徴市、揚州市、常州市を訪れ、清朝後期以降の経学史に係る史跡の歴史の変遷及び現状を調査した。特に儀徴市では中国における劉師培研究の第一人者である、万仕国氏（著作に『劉師培年譜 増訂版』『儀徴劉申叔遺書』あり）と面会し、劉師培の経学史観についての意見交換を行った。また万氏の案内により、揚州市内に現存する劉師培旧居（青溪旧屋）の現状を調査することができた。

(4) 2019年度の研究成果

20世紀初頭以降の学者である夏曾佑、劉師培、馬宗霍の経学史観を究明する作業を進めた。代表者は、前年度に引き続き、劉師培『中国歴史教科書』、夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』の訳注稿を作成し、その一部を『茨城大学人文社会科学部 人文コミュニケーション学論集』にて発表した。また研究代表者・分担者は馬宗霍『中国経学史』について考察と訳注稿作成も進めた。

上記の訳注作成を行う際、その過程で明らかになった問題点や課題を解決・整理するため、奈良教育大学橋本研究室において、6月2日、研究会を開催した。その際、研究代表者・分担者が、作成した論考について議論を重ね、改訂作業を行った。またその後訳注の草稿をメールにてやり取りし推敲を重ねた。

代表者および分担者は、清末の湖南の経学者、皮錫瑞についての論考「從『経学歴史』的創作過程看皮錫瑞的経学史観：手稿本和通行本的比較」(中国語)を完成し、それを清華大学・彭林教授主編『中国経学』(広西師範大学出版社)に投稿。審査の結果2020年8月発刊の第26輯に掲載が決定した。

(5) 2020年度の研究成果

新型コロナウイルスの世界的流行のため研究期間を延長し、その1年目にあたる。

20世紀初頭以降の学者である夏曾佑、劉師培、馬宗霍の経学史観を究明する作業を進めた。代表者は、前年度に引き続き、劉師培『中国歴史教科書』、夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』の訳注稿を作成し、その成果を『茨城大学人文社会科学部 人文コミュニケーション学論集』にて発表した。また研究代表者・分担者は馬宗霍『中国経学史』についても考察と訳注稿作成も進

めた。

上記の訳注作成を行う際、その過程で明らかになった問題点や課題を解決・整理するため、研究代表者・分担者は、作成した論考についてメールなどを使用して(コロナ禍のため対面しての議論は叶わず)議論を重ね、改訂作業を行った。また訳注の草稿も同じくメールを使用して推敲作業を行った。

代表者は、11月8日にオンラインで開催された、日本思想史学会2020年度大会において「松崎鶴雄：生涯とその学問」という題目で、20世紀初頭の湖南経学と日本の学术界との交流に関する口頭発表を行った。

(6) 2021年度の研究成果

新型コロナウイルスの世界的流行のため研究期間を延長し、その2年目にあたる。

20世紀初頭以降の学者である夏曾佑、劉師培、馬宗霍の経学史観を究明する作業を進めた。代表者は、その成果として、今年度は夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』の訳注稿を作成し、その成果を『茨城大学人文社会科学部 人文社会科学論集』にて発表した。また研究代表者・分担者は馬宗霍『中国経学史』についても考察と訳出を進めており、その成果後を担者が中心となつて訳注稿を作成した。

上記の訳注作成を行う際、その過程で明らかになった問題点や課題を解決・整理するため、研究代表者・分担者は、作成した論考についてメールや電話などを使用して議論を重ね(コロナ禍のため対面しての議論は叶わず)、それを基に訳注の改訂作業を行った。

(7) 2022年度の研究成果

20世紀初頭以降の学者である劉師培、馬宗霍の経学史観を究明する作業を進めた。代表者は、その成果として、今年度は劉師培『中国歴史教科書』の訳注稿を佐々木満実氏と共同で作成し、その成果を『茨城大学人文社会科学部 人文社会科学論集』2号にて発表した。また研究代表者・分担者は馬宗霍『中国経学史』についても考察と訳出を進めており、それを担者の勤務先である『奈良教育大学国文』誌上にて連載する予定である。

上記の訳注作成を行う際、その過程で明らかになった問題点や課題を解決・整理するため、研究代表者・分担者は、作成した論考についてメールや電話などを使用して議論を重ね、それを基に訳注の改訂作業を行った。

本研究の結論として、代表者は「漢学者松崎鶴雄から見た湖南の経学大師：王闈運・王先謙・葉德輝」、分担者は「湖南長沙・南学堂での人的交流から見る皮錫瑞の経学史観形成」の論文を完成させた。それらは2023年度中に出版予定の『アジア遊学』、「20世紀前半における中国学の諸潮流と日中文化交流(仮題)」において発表される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 井澤耕一・佐々木満実	4. 巻 2
2. 論文標題 劉師培『中国歴史教科書』訳注（五）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部 人文社会科学論集	6. 最初と最後の頁 266～282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 1
2. 論文標題 夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』訳注（四）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部 人文社会科学論集	6. 最初と最後の頁 259～272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00019929	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 7
2. 論文標題 劉師培『中国歴史教科書』訳注（四）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部 人文コミュニケーション学論集	6. 最初と最後の頁 155～170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00018907	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 橋本昭典	4. 巻 72
2. 論文標題 西撰の漢学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新しい漢字漢文教育	6. 最初と最後の頁 80～90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井澤 耕一・橋本 昭典	4. 巻 26
2. 論文標題 従『経学歴史』的創作過程看皮錫瑞的经学史觀：手稿本和通行本的比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国経学	6. 最初と最後の頁 153～168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 6
2. 論文標題 夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』訳注（三）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集 = Bulletin of the College of Humanities and Social Sciences Ibaraki University. Studies in humanities and communication	6. 最初と最後の頁 119～128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00018687	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本 昭典	4. 巻 68
2. 論文標題 播磨の漢学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新しい漢字漢文教育	6. 最初と最後の頁 51～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 5
2. 論文標題 劉師培『中国歴史教科書』訳注（三）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集	6. 最初と最後の頁 191～196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00018119	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本昭典	4. 巻 67
2. 論文標題 但馬・丹波の漢学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新しい漢字漢文教育	6. 最初と最後の頁 49～57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 3
2. 論文標題 夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』訳注(二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集	6. 最初と最後の頁 110～116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34405/00017927	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井澤耕一	4. 巻 なし
2. 論文標題 東アジアにおける祖先祭祀の諸相：中国、朝鮮、日本を例にして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小島毅編『中世日本の王権と禅・宋学』汲古書院	6. 最初と最後の頁 5～24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 2
2. 論文標題 劉師培『中国歴史教科書』訳注(二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集	6. 最初と最後の頁 231～238
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34405/00017887	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 1
2. 論文標題 夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』訳注(一)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集	6. 最初と最後の頁 127 ~ 132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34405/00017756	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋本昭典	4. 巻 11
2. 論文標題 中國古代「情」觀念芻議：尋求「感情論」的所在	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東亞觀念史集刊	6. 最初と最後の頁 187 ~ 222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本昭典・井澤耕一	4. 巻 第41号
2. 論文標題 馬宗霍『中国経学史』訳注(一)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良教育大学国文	6. 最初と最後の頁 1 ~ 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井澤 耕一	4. 巻 22
2. 論文標題 劉師培『中国歴史教科書』訳注(一)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 茨城大学人文学部紀要. 人文コミュニケーション学科論集	6. 最初と最後の頁 201 ~ 206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34405/00017658	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 井澤 耕一
2. 発表標題 松崎鶴雄：生涯とその学問・思想
3. 学会等名 日本思想史学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井澤耕一
2. 発表標題 従晩清経学家看的宋明理学 以皮錫瑞『經学歴史』及『經学歴史』手稿本為中心
3. 学会等名 宋明理学國際論壇 暨上海儒学院第二屆年會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本昭典
2. 発表標題 諸子百家を哲学する
3. 学会等名 愛知教育大学国語専攻学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本昭典
2. 発表標題 「東洋倫理」という構想 「道德の根源」言説から見る「教育勅語」後の儒教
3. 学会等名 「近代東アジアの伝統を考える」研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋本昭典
2. 発表標題 中国古代「情」觀念と感情論
3. 学会等名 阪神中哲談話会・特別発表大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 葛 兆光 著、橋本 昭典【翻訳】	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 384
3. 書名 中国は“中国”なのか 「宅茲中国」のイメージと現実	

〔産業財産権〕

〔その他〕

茨城大学人文社会科学部人間文化学科 教員一覧 井澤 耕一 https://info.ibaraki.ac.jp/Profiles/15/0001440/profile.html 奈良教育大学教員紹介 橋本 昭典 https://www.nara-edu.ac.jp/guide/list/japanese_language/hashimoto.html
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 昭典 (HASHIMOTO AKINORI) (20379522)	奈良教育大学・国語教育講座・教授 (14601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------